

各教科において言語能力を育むための「育成イメージ」を

共有するための実践の工夫

田中啓介（川崎市立有馬小学校）・高橋純（東京学芸大学）

概要：言語能力は、新学習指導要領で教科横断的に育成すべき資質・能力と明記された。しかし、言語能力という資質・能力の意味は、とても広く、教員によって思い浮かべる力には違いが生じることが多い。また、他の教科において教科横断的に言語能力を育むよりも、国語科のみで育成するというイメージをもつ人が多く、共通理解が図りにくいという実態がある。本実践では、校内の授業研究会で行った授業を元に、教科や単元の特性やねらいに合わせて、育成したい言語能力を明らかにし、各教科における言語活動の場面から言語能力を育成する場面を設定した。その授業過程を「育成イメージ」として、学校全体で共有することを目指すための実践を行った。

キーワード：言語能力の育成，授業過程，探究的な学習

1 はじめに

新学習指導要領（文部科学省 2017）では、「言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科の特性を生かし、教科横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする」と示された。

本校でも、児童の実態を話し合う中で、言語能力を育成したいという声が聞かれるようになった。しかし、言語能力と言っても、その意味は広く、教員個人が思い浮かべる言語能力には違いがあり、「相手を意識して発表する力」や「文章の意図を読解する力」、「豊かな語彙力」など、さまざまである。このように、教員がもっているイメージ異なっていることは、校内での研究を進める上で問題となると考えられる。

さらに、教育課程特別部会 論点整理（中央教育審議会 2015）にもあるように「これまでの学習指導要領は、知識や技能の内容に沿って教科等ごとには体系化されてい」たので、多くの教員にとって言語能力の育成は国語科で行うものであるという認識が根強いようである。

そこで本実践では、言語能力という資質・能力を教科横断的に育成するという新学習指導要

領の理念に沿って校内研究を進めるために、「言語能力を構成する資質・能力」（中央教育審議会 答申 2016）で3つの柱にまとめられているものを整理し直して言語能力を教科横断的に育成するというイメージをもつことができるようにした。（表1）

（表1）言語能力を構成する資質・能力

知識・技能	a 言葉の働きや役割に関する理解 b 言葉の特徴や決まりに関する理解と使い分け c 言語文化に関する理解 d 既有知識（教科に関する知識，一般常識，社会的規範等）に関する理解
思考力・判断力・表現力等	a 情報を多角的・多面的に精査し構造化する力 b 言葉によって感じたり想像したりする力 c 感情や想像を言葉にする力 d 言葉を通じて伝えあう力 e 構成・表現形式を評価する力 f 考えを形成，進化する力

学びに向かう力・人間性等	a 社会や文化を創造しようとする態度 b 自分のものの見方や考え方を深めようとする態度 c 集団の考えを発展させようとする態度 d 心を豊かにしようとする態度 e 自己や他者を尊重しようとする態度 f 自分の感情をコントロールして学びに向かう態度 g 言語文化の担い手としての自覚
--------------	--

「知識・技能」では、国語科で指導する内容が多いが、「思考力・判断力・表現力等」及び「学びに向かう力・人間性等」では国語科以外でも教科横断的に取り扱うことがイメージできるのではないかと考えた。

そこで、この表から、教科、単元等の特性やねらいに合わせて、育成したい言語能力を抽出し、教科横断的な「育成イメージ」を学校全体で共有するための実践を行った。

2 実践の方法

(1) 実践対象および実践時期

- ・対象：川崎市立X小学校 教員
- ・時期：2017年4月～（継続中）

(2) 実践の概要

授業研究会（年7回、第2回まで終了）の形式で普通級（12）、支援級（1）、少人数指導（2）の担任が授業を公開予定である。

公開する授業案を作成するにあたっては、次の流れで行った。（表2）

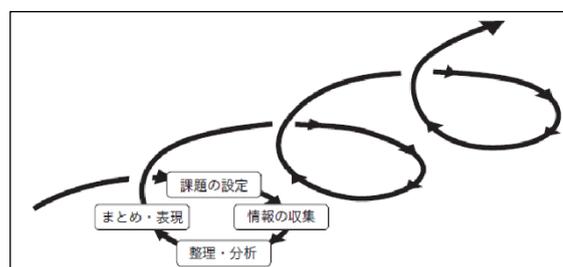
（表2）指導案作成の流れ

- 1) 授業者が国語科、社会科、算数科、理科の中から公開する教科を選択する。
- 2) 単元、本時の目標に沿って指導案を作成する。
- 3) 「言語能力を構成する資質・能力」の中から育成したい言語能力を抽出する。
- 4) 育成したい言語能力を育成する場면을検討し、設定する。

言語能力を育成する場面では、言語活動が行われている。総合的な学習の時間をはじめとする各教科の言語活動においては、これまでも探究的な学習の充実が語られてきた。

そこで、4)の育成する場面を設定する際に、本時の学習活動を「探究的な学習における児童の姿」（小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編、文部科学省 2017、図3）に当てはめ、今後、実践が積み重ねられたときに、育成したい言語能力と言語能力を育成する場面を類型化できるようにした。

（図3）探究的な学習における児童の姿



3 結果

【実践1】

◆6年社会科「元との戦い」

本時は歴史単元「元との戦い」である。「幕府の力がおとろえていった理由を、幕府と御家人の関係とかかわらせて考える」ことが社会科における本時のねらいとなる。

実際の授業の中では「蒙古襲来絵詞」や地図などの教科書に掲載されている資料を読み取り、グループで話し合いながら、幕府と御家人の関係を話し合うという学習活動を設定した。

この学習活動は、複数の資料を検討したり、グループの中で話し合ったりするという言語活動であると捉えることができ、探究的な学習にあてはめると、「整理・分析」の場面とすることができた。これを社会科における授業過程として示した。（表3）

この言語活動からは、

- | |
|--------------------------------------|
| a 情報を多角的・多面的に精査し構造化する力（思考力・判断力・表現力等） |
|--------------------------------------|

を育成することができると考え、上記を育成し

たい言語能力に設定した。

(表3) 社会科における授業過程

1. 教科書資料を読み取る	情報の収集
2. 課題を設定する	課題の設定
3. 教科書資料を読み取る	情報の収集
4. 2度の襲来によって幕府 と御家人との関係性が崩 れた理由を話し合う	整理・分析
5. ふりかえりを書く	まとめ・表現

このことから、本時の学習においては、「整理・分析」の場面において「a 情報を多角的・多面的に精査し構造化する力（思考力・判断力・表現力等）」という言語能力が育成されるということがわかり、授業過程を示すことで共通のイメージをもつことができた。

【実践2】

◆2年算数科「たし算とひき算の図」

本時は、4問の学習問題を読み取り「加法、減法の問題場面をテープ図や式に表すことができる」ということが算数科としてのねらいである。

実際に学習問題を解くためには、文章問題を読む、見通しをもつ、テープ図に表す、立式する、計算をするという一連の活動が必要になる。これらの活動の中で児童がつまずくと考えらえるのは見通しをもつという活動である。見通しをもつというのは、だいたい答えを見積もるという意味で使われることが多いが、この学習問題においては、さらに加法か減法かという方法の見通しを持つということが大事になる。つまり、問題文の中にある「あわせて」や「のこり」という言葉を見つけて計算方法を考えることができる。しかし、次のような学習問題もある。

AとBがあわせて○個あります。 このうちAは□こです。 Bは何こでしょうか。
--

この学習問題では「あわせて」という言葉が出てくるが、引き算の問題である。このように

「あわせて」という言葉だけを見て足し算で計算をすると正解にたどり着くことはできない。このことから、本時において問題文を正確に読み取るという言語活動が大事な活動であると考え、育成したい言語能力を以下のように設定し、算数科における授業過程をまとめた。(表4)

f 考えを形成、進化する力（思考力・判断力・表現力等）

(表4) 算数科における授業過程①

1. 問題場面を把握する	情報の収集
2. 課題を設定する	課題の設定
3. 問題文を読み取る	情報の収集
4. テープ図に表す	整理・分析
5. 立式して、答えを求める	まとめ・表現
6. ふりかえりを書く	まとめ・表現

本時の学習では、「情報の収集」の場面において、「f 考えを形成、進化する力（思考力・判断力・表現力等）」という言語能力が育成されるということがわかり、共通のイメージをもつことができた。

【実践3】

◆3年算数科「あまりのあるわり算」

あまりのある割り算の計算し、「ボールを全部箱に入れるには、何箱いるでしょうか」という「具体的な問題場面で、除法のあまりの意味について考え、処理の仕方を考える」のが本時のめあてである。あまりのある割り算の計算自体は既習事項となり、本時では計算した後の商と余りをどのように処理をするかということが学習の課題となる。

児童は本時まで「何ふくろできて、何こあまるでしょうか」「1人分は何こになって何こあまるでしょうか」といった学習問題に取り組んできた。本時のような「ボールを全部箱に入れるには、何箱いるでしょうか」という学習問題を解くためには、きちんとこの部分を読み取り、適切な処理をしなくてはいけない。

そこで本時では、学習問題の文章と計算の結果から、適切な処理をして求められた答えを出

すという活動から育成したい言語能力を以下のように設定した。

a 情報を多角的・多面的に精査し構造化する力（思考力・判断力・表現力等）

また、本時の学習活動を探究的な学習における児童の姿にあてはめた授業過程を作成し、言語能力の育成の場面を示した。（表5）

（表5）算数科における授業過程②

1. 問題文を読み取る	情報の収集
2. 課題を設定する	課題の設定
3. 立式して、答えを求める	整理・分析 まとめ・表現
4. あまりの処理の仕方を考える	
5. ふりかえりを書く	まとめ・表現

本時の学習では、「整理・分析」「まとめ・表現」の場面において、「a 情報を多角的・多面的に精査し構造化する力（思考力・判断力・表現力等）」という言語能力が育成されるということがわかり、共通のイメージをもつことができた。

4 考察

教科横断的な言語能力の育成については、教員間のイメージの差が大きかったが、育成したい言語能力と育成する場面という「育成イメージ」を示すことで共通理解が進んだ。

これは、普段行っている各教科の授業を大きく変えることなく、「育成イメージ」を組み込むことで、安心して受け入れることができたからであると考えられる。

実際に行った3つの授業の事例を見ると、育成のイメージはそれぞれ異なるが、教科、単元の特性等を考慮しながら「育成イメージ」を設定することで国語科以外の教科についても、どのような場面で言語能力を育成することができるのかということを経験しやすくなったと考える。

5 おわりに

言語能力のような資質・能力の育成には、時

間がかかるが、汎用的な力として、児童に確実に身につけさせたいと考える。1人の教員が個人的に教えるのではなく、学校全体で系統的に指導していく必要があるが、それには教員間の連携がとても重要である。

国語科以外の教科での言語能力の育成については、どのように授業をすればよいのかという心配する声もあった。本実践は、まだ社会科と算数科のみであるが、それでも回数をこなしていくうちに、徐々に「育成イメージ」の共有が進んできた。今後も、さらに教科、単元、学年を広げて実践をしていき、言語能力の育成に向けて、取り組んでいきたい。

参考文献

- ・文部科学省(2017) 小学校学習指導要領
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiel_dfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf
- ・文部科学省(2017) 小学校学習指導要領 総合的な学習の時間編
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiel_dfile/2017/07/25/1387017_14_1.pdf
- ・中央教育審議会(2016) 言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/1377098.htm
- ・中央教育審議会(2015) 教育課程特別部会 論点整理
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afiel_dfile/2015/12/11/1361110.pdf